



薬学

昔むかし



日本薬学会は126年の伝統を持つ。その学会誌「薬学雑誌」も古い。最古とさえいえなくもない。維新後、明治6年頃から新聞と雑誌の区別ができてきて、明六雑誌(1874)、学芸志林(1877)、東洋学芸雑誌(1881)など多数刊行された。しかし多くは短命で続かなかった。医学関係では順天堂医事雑誌(1875)、東京医事新誌(1877～1960)、東京薬学新誌(1878)など。今につながるものは、順天堂医事研究会雑誌(1887)、成医会月報(1882～、後の東京慈恵医大雑誌)、学会誌では、東京数学会社雑誌(1877、後に数学会と物理学会に分裂)、東京化学会誌(1880)、薬学雑誌(1881)が古い。文明開化の時代以来、名前も変わらず、しっかりと続いている薬学雑誌を我々は誇りに思っている。

その初期の薬学雑誌は、小さく薄く、茶色に変色、丁寧に触らないと破れそう。100年の時を超え、手ざわり、匂いは当時と同じかどうか分からない。しかし、明治の薬学人の活躍ぶり、熱意が随所から伝わってくる。そこで今月から、薬学雑誌を中心に「昔むかし」を幾つか紹介する。引用する原文の、句読点なしカタカナ文ハ読ミヅライノデ、現代仮名遣いに改めることもあるが、たまには旧字体、難読字なども楽しんでもらいたい。